

こだま俳壇(十二月句会)

冬の陽に部屋の奥まで覗かれる
雑魚寝して足の陣取り置炬燵
木枯に追われてくぐる縄暖簾
農の句を詠みし友逝く霜降月
過疎の村落葉の上にまた落葉
毎日が炬燵の人になりにつけり
動員の氷雨に追われ還らざる
冬の星句会先達の死を悼む
姉妹して父に叱られ炬燵入る
木枯や寅さん佐渡に宿を取る
凧とともにラーメン屋に入る
猫も子も場所取り合いの炬燵かな
歳時記に亡母の拾いし落葉あり
極月や後ろへ投げる楢田球
炬燵入り小粒の蜜柑超甘し
鉢の磯菊陽差しを浴びて咲き始め
七ならべ皆集まりし炬燵かな
木枯の吹きすすきびけり長屋門
切炬燵はや足げんか兄妹

白井保次郎
小室豊子
友井眞言
松尾佐知子
角田英昭
高橋和江
田中一男
島田多嘉子
並木まり子
瀧澤正行
中野みどり
常世田芳子
中村桂子
坂守
後藤貞夫
柳瀬節子
大塚敏高
本山文子
木村武子

花札の散らかっている炬燵かな

講師 太田士男先生